

# T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## 古田武彦氏 新春講演会

# 日本の禁書と 歴史学の未来

古田武彦氏の新春講演会は、一月十五日午後一時より、東京都勤労福祉会館大ホールで、本会主催により行われました。以下にその要旨をご報告します。

古田 あけましておめでとうございませう。新年を迎えて、今年も新しい研究の進展がありそうな予感を、いま抱いているところでございます。本日のテーマは、第一に「禁書」の問題です。後半では、最近の新しい発見について、時間の限り話させていただきますと思います。

### 中国禁書大観

三年前に中国に行きました。本日もここにも会長の高田さんはじめ、ご一緒に行った方もおられます。その目的は、西域に西王母の故地を確かめることでしたが、帰途に北京の本屋さんで、「中国禁書大観」というかなり大部の本を買いました。秦朝から清朝に至るまでの、中国歴代王朝の「禁書」政策および事件の、詳しい報告と、各禁書目録を添えた本で

す。天安門事件のあとに、上海の文化出版社から発行されたものです。昨年の九月に、日本でもその抄訳が新潮選書「中国の禁書」として出版されました。この抄訳本の方の良いところは、原書では記述が清朝で終わっているのに対して、その後も現代まで、「禁書」の政策がなくなったわけではないことを、訳者があとがきの形で述べておられる点です。原著が清朝以後のことを書かなかったのは、史料がないからではなくて、書くと出版に差し障りがあるからでしょう。

ところが、私の目から見ると、両書に共に欠落している面がある。四書五経（儒教の経典）成立以前の中国に禁書はなかったのか。ご承知のように、四書五経以後の中国の文明は、黄河中流域の中原の文明を絶対の基本としています。いわゆる中華

思想です。するとそれ以前に中国に文明はなかったのか。とんでもない、私たちが訪れた青海省方面の奥地には、玉の文明を誇る西王母の国がありました。周の第五代穆天子は、はるばると西域に西王母を訪ね、贈り物を献じ、天子に任命された、と「穆天子伝」に記されています。穆天子伝とは、「三国志」を書いた陳寿と同時代の晋代に、偶然周王の墓の中から掘り出された竹簡に書かれていた、穆天子の伝記です。ところが、黄河流域文明の学者である孔子や、その後、漢の時代に「史記」を著わした司馬遷も、このような内容は氣に入りませんでした。いやしくも周の天子が、西域の野蛮国の王の下風に立つなどとは、あり得ることではない……これは単なるお話として扱った。歴史事実とは見なかったわけです。

しかし、西域地方は今でも有名な玉石の産地です。西王母の国は、その美しい玉を象徴とする文化圏であった。中国では古来、天子の印は玉璽です。配下には、金印や銅印を与えますが、自分自身の印はあくまで玉。この伝統はどこから生じたのでしょうか。それどころか、古くは玉の字に点はなかった、玉はすなわち王を意味した。今、中学生も使う漢字

の辞書をご覧ください、玉、王のつく字はすべて高貴な字です。文字文明の生まれるとき、玉は最高の価値あるものとされた。その玉の中心的な産地が、西域西王母の国であったのです。その文明を受け継いだのが、中原の文明であったのです。

同様なことが、揚子江流域についても言えます。その一例が、江南の河姆渡遺跡。私も行きました。五、六千年前の大規模な稲作の跡、土器、缺状耳飾りなどの出土で知られています。夏の初代王禹は、その江南の会稽山に諸候を集めて、天下統治の盛儀を行った、とされています。なぜに江南か。そこがそれまでの文明の一大中心地であったからです。この江南の文明を象徴する貴重な物は貝ではなかったかと、私は考えます。また辞書を開いてみましょう。たとえば財産の財、寶物の寶、みな貝がついていますね。貝のつく字は貴重価値観を表わしています。文字の誕生に、貝文明の地江南の価値観が

反映しているのです。皮肉にも、一冊の小さな辞書が、司馬遷の史記よりももっと雄弁に、中国の歴史の真実を語っているのではないのでしょうか。

孔子も司馬遷も、西域や江南の先進文明について、何ら語るところがない……何故か。その歴史を語る書き物（ないし伝承）は、すべて消されてしまったからです。「禁書」。黄河流域に先立つ文明の記録は消されてしまったのです。

今中国を訪れると、資料館でも図書館でも、四書五経以来の中華文明の思想によって統一されています。私と話をした青海大学の学者の方々にしても、何か北京や中原に対して肩身を狭くしておられるような気配を感じました。漢の武帝のとき、董仲舒によって儒教が国教とされて以来、国教に背く書物は軽視され、または禁止され、老子の伝記など正体不明のものとなってしまいました。そのような禁書政策が、中国の誤れ

る中華思想の結果となっています。そのことには「中国禁書大観」も抄訳「中国の禁書」も触れるところはありますが、中国の禁書については、まだまだお話ししたいことがたくさんありますが、あまり面白がっていないときりがありますから（笑）急いで日本のごことに引き返します。

## 出雲・九州の禁書

昨年鳥取県の伯耆大山に参りました。志賀直哉の「暗夜行路」で有名な山です。ひそかに、大山津見神の源郷はここか、と調べに行ったのです。大山の津（港）み（神）と解釈してです。このことは結論が出ませんでした。副産物がありました。

大山中腹の大神山神社の重要な祭りを「もひとり神事」と申します。宮司さんによれば、大山頂上の池の水を運んで神に捧げる行事とのことでした。しかし、水とりと、もひとり。どうもピンときません。

長い間考えているうちに、気がつきました。出雲国風土記の有名な「国引き神話」。私はそれを縄文時代の神話と論証しましたが、「よみがえる卑弥呼」朝日文庫、その中では大山のことを火神岳と呼んでいます。主要写本は全部そうです。大神山神

社と名が変わったのは後年のことです。地元で出版された本によると、大山は一万数千年前までは活火山であったようです。その活動は、一斉にびたりと止まったものでしょうか。その余燼なり残影なりが、縄文時代まで残り、火神岳と呼ばれたのではないか。いたずらに、火の神の名が生じたはずはありません。故に、本来の祭りは、余燼の中から神聖な火種をとって運ぶ行事ではなかったのでしょうか。

「ご祭神は？」と問うと、これは即座に、明快に、「大国主命」と答えがありました。だが大国主命は弥生時代に始まる神です。それ以前の神は、何だったのでしょうか、どうなったのでしょうか。大国主命がこの地方を支配下においてから神様が入れ替わった。古い神々は、あるいは、因幡の白兔の伝説にある八十神、白兔ににせの傷薬を与えて苦しめたじわるな神々の姿に変えられて、大国主命のイメージアップに役立てられているのかもしれない。

ともあれ、ここでは縄文の古い神は消されて、弥生の新しい英雄の神に置きかえられています。その新しい英雄、大国主命もまた、国譲りによって、子孫断絶、ただ古事記に見るような、古いお話しの世界に閉じ

# 中国禁書大観



●第一部 总括 历史 禁书 沿革  
●提供迄今整理 未完 资料  
●首次 进行 系统的 理论 探讨  
●副 编 文 史 哲 语 学 领域 代表 著作  
上海文化出版社

「中国禁書大観」の背文字 安平秋・章培恒主編

込められてしまいました。言うまでもなく、新しく権力を握った九州王朝としては、先行する大國主命の國の繁栄や栄光を、華々しく語られるのを欲しなかったでしょう。その事蹟は凍結され、地下に眠らされた。それが、七世紀末、九州王朝の衰亡とともに、息を吹き返して、出雲から新しい政權のもと古事記の中にもたらされた……。ここに九州王朝による禁書の姿が、浮かび上がってきます。

### 伝わらない帝王本紀

次に、いよいよ日本書紀を見ましょう。神代紀の中には、十指に余る「一書」が登場します。一書、という本の名があるはずはありません。当然題名があつたはずですが、その名前は書かれていません。また、一書として登場するのは神代紀だけです。ではこれらの書には神代以後のことは書かれていなかったのでしょうか。そんな歴史書などありません。

ほかに、帝王本紀、日本旧記、日本世紀などの本の名が見えます。書紀の編者は、当然それらの本を目前に見ているのです。それらが、どうして大和政權の書庫に保存されなかったのでしょうか。なかなしく、

帝王本紀。これは代々の王の事蹟を記した本です。そんな王朝にとつて、大切の中でも大切な本を、どうして保存しておかなかつたか。問いを發すれば答えは自ずから明らかです。自分たちの王朝の歴史ではなかつたから……、保存しておいて世に知られては困る本であつたから。これが正直な答えでしょう。これらの本は、日本書紀編者によつて都合よく取捨選択されたあととは、敢えて廃棄されたのでしょうか。

同じ大和政權のもとで作られた古事記でさえ、公式には歓迎されませんでした。克明な記録で知られる続日本紀に古事記が撰上されたはずの元明天皇の代の記録を見ても、古事記に関する記載は一切ありません。日本書紀が正史となつた後は、これと食い違う古事記の内容、系図等は、公式に認証してはならないものだったので。だから、ひそかに地下に伝えられ、鎌倉時代になって初めて日の目を見るに至つたことは、皆さんご承知の通りです。【新撰姓氏録】という本があります。大和政權下の各氏族の系譜です。何が、新撰でしょうか。旧来の氏族の系譜を、大和政權のイデオロギーに合うように、新しく編成し直した系譜です。だから、当然旧撰の系譜は伝わっていま

せん。伝えられてはならないものであつたからです。八世紀以来の大和政權の歴史を見れば、このように「禁書」だらけと申せましょう。

### 他言無用、門外不出

話を現代に移します。和田家文書。二十余年前に、市浦村史資料編として公表されて以来、得体の知れぬ奇書と目されている間は、問題にならなかつた。それを私が「真実の東北王朝」で、真剣に研究すべき歴史史料として注目し始めて以来、にわか反撃する人が現われました。古事記、日本書紀、各風土記などの史料があれば足りると考えている人たちにとつては、「東日流外三郡誌」など必要ない、むしろじやまな史料なのでしょう。この問題については、別の機会にも述べましたので、ここでは重点だけを簡単に申ししましょう。

一群の人たちは、和田家文書を和田喜八郎氏の手になる偽作として攻撃しています。その証拠の一つに、新しい考古学事実が出現する度に、対応する文書が追つかけて、和田家から発表される、と言います。だが、今回の三内丸山遺跡をごらん下さい。二十メートルを超える柱跡が発見されました。考古学者も驚いています。

しかし、すでに東日流外三郡誌には三内の地に「雲抜ける如き、石神の殿ありき」と、書かれていました。これを貴重な文献史料と言わずして、何でしょうか。

その他、進化論、適者生存、宇宙大爆発などの理論が、一般科学史の通念に反して、寛政年間の長崎での聞き書きとして、記述されてきたことも偽作の証拠とされてきました。しかるに昨年、英国の信頼ある学者の著としてチャールズ・ダーウインの祖父、エラズムス・ダーウインの伝記が発表されました。それによると、すでにその祖父の段階（寛政以前）でヨーロッパではそれらの理論の原型が論議されていたことが明らかにになりました。一般の科学史の認識が、まだそこまで及んでいなかっただけのことなのです。

次に、「国史画帖大和桜」。疑う人は昭和十年に、皇国史観宣伝のために出版されたその画帖の絵と、秋田孝季の著作とされる歴史絵巻とに、共通する絵柄が多数あることから、これこそ昭和十年以後の偽作の動かぬ証拠、と言いはやしました。影響を受けた人も多いようです。が、国史画帖を手に入れて調べましたら、その序文には「絵は古今の名画より取り……」と、古い絵の複製である

ことを自ら宣言してありました。これなら共通の絵柄があっても不思議はありません。しかるに、偽作論者はこの序文の事実をひたかくしにしたまま性急に論難に走ったのです。

もう偽作論者は、これらの点にまともにも反論する余地はありません。奥の手を使って、今はこの古田自身を偽作者に仕立てようと躍起です。(笑) しかし、もう結果は明らかです。この問題の終幕の訪れる日を、皆さんは今年中に目のあたりにされることになりましょう。

ついでに、和田家文書について付け加えます。その内容は、明治国家の基本構造をゆるがすものを含んでいます。たとえば、『北斗抄』巻十二(未公開)の一部を引用してみましよう。最初に「愚かなり、廃仏棄釈……」とあります。以下意識で「大和政権の神を至高として各地方の神仏の信仰を弾圧するとは、江戸幕府でもやらなかったことを明治政府がやっている。神道以外の学問を排斥し、神に対しても、村社とか、郷社とか、差別的な格付けをしている。神仏に何の咎があるか。このような政治を行っているのは、いずれ国に反乱が起こり、国家は滅亡に至るであろう……」そして終りには「明治十五年兇月兇日自由民権葬らる」とありま

す。これは和田末吉自身の文章です。このような文書が、明治の世に公表できるとは思えません。故に、和田家文書には随所に、「これを公表すると世の迫害を招くから、時機の至るまで必ず門外不出、他言無用とせよ」と繰り返し念を押してあるのです。江戸く明治の禁書です。

### 権力は永遠を願う

以上の考察から、私は昨年末、禁書のグラフを作ってみました。古田クラブ……(笑) 縦軸はTで時間軸。中国で見ると、夏殷周以前から、現代にまで及びます。日本でも縄文、弥生時代も入ります。一方横軸はS、スペースで空間軸です。出雲、九州、大和など、あらゆる権力の所在地がマークされます。海外では、バイブル、コーランの世界にも及ぶでしょう。あらゆる権力は、自己の権力を永遠のものとしようとす願望を持ちます。面白いことに、中国では、天文、占いの書も禁書になります(これに倣った大和政権の律令もまた)。権力は永遠を欲しますが、天文、占いはそれを相対化します。たとえば、乾の方角に彗星が現われるのは、天下大乱の兆し……などと。だから、天文、占いの書も禁書になるのです。

しかし、一つの固定された権力が、永遠であろうとする願望は、古今の歴史に徴すれば、しよせんは虚しい願いというほかはないのであります。(十分休憩)

### 海洋民族征服説

(以下後半の内容は、スペースの関係で要点を略記します。)

一昨年は神津島に行き、この正月は八丈島を訪れまして、今伊豆神学ということを考えているわけですが、八丈島でも中心的な神社が優婆夷宝明神社と申しまして祭神は八十八重姫です。八百万の神より素朴な形で、しかも女神ということ、縄文の神を伝えていると思います。丹那婆伝説という説話もあります。これは昔、大津波で妊娠している女性がただ一人生き残った。生まれたのが男の子で、その母子の間に次々と生まれた子供が島民の祖先である、という説話です。ギリシャでも、ソホクレスの母子相婚のテーマが悲劇としてあります。八丈島は悲劇ではない。むしろ佳い話です。今でも、丹那婆の記念碑、お墓もあります。後世的な道徳観念発達以前の素朴な形を伝えていきます。

島の立派な歴史資料館があまりまし

て、興味ある縄文遺跡の姿がうかがえますが、中でも私が注目したのは、高床式住居です。八丈島と同じ様式のもの、沖繩にあり、南方諸島に見られる様子が写真で比較してありました。それを見て私は最近注目している「江戸時代パラウ漂流記」(11ページ参照)を連想しました。これは文政年間に岩手の漁民が、漂流してパラウ諸島に流れ着き、運よく長崎まで帰ったとき、役人が聞き書きしたものが資料になっています。それによりますと、島の風俗が、とてもよく魏志倭人伝の倭人の風俗に似ている。刺青をして、それが島により、身分により様式が異っている。身体に朱を塗る習慣がある。もちろん、高床住居ですが魏志の倭国も吉武高木、吉野ケ里をはじめ高床住居です。文献でも、神武天皇が泊めてもらった「足ひとつ上りの宮」、あれは川の上に立てかけた高床住居と言われています。

面白いことに、パラウでは、女子が成人すると、アルメンゴルという共同の成人宿に入って売春をする。母親も娘が嫁いでくれることを自慢にするといえます。何だか吉原の遊廓のようですね。世話をする男衆が一人いて、代金の取り立てなどもする。ほら、卑弥呼にも男弟のほかの

一人の男が、身の廻りの世話をし、言葉伝える。何だか似ていますね。もつと似ているのは、一年を西風の季節と東風の季節と、二つに分けて、それぞれ一年としています。私は『魏略』の注記から倭人の二倍年歴という仮説を提起しましたが、もしかしらその風俗の起源が、これら南方諸島にあるかもしれない。

ついでに申しますと、魏志倭人伝の記述の目的は、卑弥呼の女王国で終点と、私も(他の誰も)考えていましたが、間違いでした。中国の関心からすれば、さらにその東はどうなっているか、それも重大な課題であったはずです。だから、侏儒国まで四千里、裸国黒齒国まで船行一年(実は半年)と、距離が書かれているのです。どうもわれわれ日本人の身勝手、この点を見逃していました。

最後に、時間がありませんので、ほんのヒントだけを、これからの研究のために申し上げておきます。さきほどの様々な南方風俗の在り方から、南方民族が日本に渡来した、しかも上層階級、支配階級として渡来したような形跡があります。これを『海洋民族征服説』と称しまして、今後の研究の課題としたいと思います。(拍手)



学問は真実の大道である。真実を目指し、真実に達する。誰にもそれ以外の目標はなく、それ以外の方法もまた一切存在しないのである。

わたしがかつて『邪馬台国』に非ず、『邪馬台国』の立場をとり、それが九州の博多湾岸とその周辺にありとしたのも、史料事実と論理を重んずる、その立場に一貫して固執したからであつた。近年、博

多湾岸(吉武高木、雀居)とその周辺(吉野ケ里、平塚川添等)に累出する、弥生の宮殿跡群の存在は、わたしの学問の方法が虚でなかつた事実を明瞭にしめしている。

同じくわたしは「東北王朝」の語を以て、東北地方北辺に一大先進文明の存在したことを暗示した。果然、昨年の三内丸山遺跡(青森市)の高層木造建築物等の出土は、わたしの指摘が虚でなかつた事実を明示したのである。その上、「雲を抜ける如き石神殿」(東日流外三郡誌)の一節が、そ

# 学問の大道

の伝承であり、その文献的な反映であることをいち早くわたしが指摘しつづけたにもかかわらず、諸報道機関は一斉にこれを無視し、報道拒否ないし報道回避を行った。日本の未

来の民主主義社会にとつて、日常生活の「乗車拒否」の類とは比較にもならぬ危険事態である。そののみか、反和田家文書の過激派とも言うべき一派は、「季刊邪馬

台国」(55号等)によつて反撃を強めた。それも和田喜八郎氏やわたしに対する個人攻撃と人格中傷であつた。かつて戦前、津田左右吉に対して養田胸喜等、「原理日本」一派が展開した卑劣な手口と同じく、全く非学問的な攻撃が核心となつてい

中傷するという、真に犯罪的な手法に奔つた。ここに至つてわたしはかつて十九世紀末、フランスで生じたドレフュス事件における偽造書類・偽証人の(へでち上げ)を想起せざるをえない。歴史は二度繰返したのである。ともあれ、真実に勝るものなし。アニュトス・メレトスの輩の中傷が結局ソクラテスの真実を打ち破れなかつたように、地上の権力・権威と結託せんとする、偽宣伝やいかなるパフォーマンスによつても、人間と学問の真実は打ち破りえないのである。

## 古田武彦

今年以降、その醜悪な手口の一

切が明らかになるにつれ、彼等とその同調者の比類なき悪名もまた、未来の歴史の中にしっかりと記録されることとなるであろう。右、天と地と学問の神の面前で誓言する。

仕立て上げ、それを「証拠」として

一九九五年一月十五日  
以上、講演会の場で配布された古田氏の声明文です。



## 『邪馬台国』はなかつた

## が世に出た頃

編集者米田保氏の夫人、米田英子氏に聴く

古田武彦氏の古代史第一書「邪馬台国」はなかつた」が出版されて、歴史学界に衝撃を与えたのは、昭和四十六年、今から二十三年前のことです。古田氏自身の業績とともに、この本を企画して世に送った編集者、米田保氏（大阪朝日新聞社図書出版部）の功績は、忘れることはできません。氏は、昭和五十七年、六十八才で惜しくも死去されましたが、幸い夫人の英子さんがお元気で、とくに、今回お願いして、当時のお話を聞くことができました。

「これはたいへんな記事だ。ぜひ原稿をお願いしたい。」  
と、さっそく京都に古田先生をお訪ねしたところ、まだ読売新聞社からは、何の話もないとお話でしたので、さっそく原稿をお願いしてきたと話しております。



米田 保氏

「もともと夫は、社会部の記者をしておりますが、身体が弱いほうで、昭和三十年代に六年間も休職しました。復職してからは、無理がないようにと朝日新聞社にも心配していただき、図書出版の仕事についていました。それでも記者魂というのでしょうか、すでに有名になられた先生方へお願いして本を書いていただくより、自分で、ニュースの中から将来性ある筆者を探して、本を造る……、そういう行き方を目標とされていたようです。公害病と

取り組まれた萩野昇医師の「イタイイタイ病との闘い」、ネパールで結核の治療に献身された岩村昇氏の奥様、岩村史子さんの「わが愛はヒマラヤの子に」などが、その仕事の例でございます。新聞で古田先生の記事を見て、すぐピンときたと申しますのも、夫のかねてからの念願にかなうものを感じたからでしょう。私が申すのも恐縮ですが、そういう直感と決断は、とてもすぐれた人でございました。

「執筆をお願いしてからは、とても順調で、とくに苦勞した様子はないがえませんでした。本ができませんと、すぐ追っかけ、再版、三版と、たいへんなセンセーションでした。夫も張り切って、

「この本から、日本の歴史が変わってくるよ。天照中心の歴史ではなくなるんだ。」

と、口ぐせのように申していました。古田先生がお見えになると、何時間でも書斎にこもりつきり、お食事の時間も忘れて話に熱中しているのがいつものことでした。東大の榎先生から反論が新聞に出ましたときも、さっそくお電話で、「先生、必ず反論してください。このままではいけません、何回でも反論はなさってください。」と、熱をこめて申していました。そんな様子を私は脇から見ていまして、著者と編集者というより、なんだか兄弟のよ

うな信頼の関係を感じたことでございます……

「夫はいつも申していました。『私の仕事は朝日新聞社の仕事としてやっているの、個人としての仕事ではない。だから、どの著者にも、私個人の名前は出さないでください、とお願いしている。』そのとおり、どの本にも、『邪馬台国』はなかつた」にも、主人の名前はどこにも出ていないはず。その後、「古田さんは、たったひとり、全学界を相手に頑張っておられる。そこが、何よりお偉い。」と申しておりました。

私ごとを申して恐縮ですが、主人は、私がお家の中で、お茶ひとつ運んであげても、きまつて「ありがとう」と、ごく自然に言う人でした。この人生で、ありがとう、その一言の重いひびきを私に教えてくれた人、と思っております。

なお、米田夫人は現在西宮市にお住まいで、今回の地震で、お身体は無事で、元気にしておられますが家屋に半壊の被害を受けられました。謹んでお見舞い申し上げます。

〒994-11-5 東京都吉祥寺市のホテルロビーにて 文／編集部



# 安藤昌益 のこと

天地は一体にして  
上無く下無く



木村由紀雄

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉（同趣旨の言葉）が「東日流外三郡誌」に繰り返し登場すると知って驚かない人はあるまい。うさんくささを感じても当然かもしれない。あまりにもラディカル、あまりにも奇矯であるからだ。ここで直ちに思い起こされるのは同じ東北の片隅で時代に抜き出た思想を展開した安藤昌益のことである。彼は十八世紀半ば、八戸を中心に活動したことが、今日では明らかになっている。

しかし、二十世紀始めに碩学狩野亨吉博士が発掘するまでは全く忘れられた存在であった。昌益の名前が一般に知られるようになったのはカナダの歴史家・外交官ノーマンが、第二次世界大戦後に出版した岩波新書「忘れられた思想家」がキッカケであったといえよう。明治維新の研究で有名なノーマンは封建制度を否

定した日本人はいなかったのか、とたずね人を探すように探し回り、昌益を発見したのである。もちろん、ノーマンが発見できたのは狩野博士の研究があったからである。

一八九九年、当時第一高等学校の校長であった狩野博士は稿本「自然真営道」を古本屋から購入した。これが昌益発見の発端である。狩野博士は稿本を研究してその思想に「驚、一九〇八年には「大思想家あり」という匿名の談話を発表して昌益の存在を初めて公表した。こうした発表形式をとったのは、昌益の思想が過激であるため、無用な誤解を避けようとしたからだといわれている。

その後の昌益研究もドラマティックである。「自然真営道」は東大に売却され、狩野博士の手元から離れた。その直後に関東大震災による火災で焼失してしまった。ところが、一部は東大の三上教授に貸し出されていて無事で、現在も東大図書館にある。狩野博士はその後昌益の著作を古本屋を通して渉猟し、刊本「自然真営道」、「統道真伝」（「自然真営道」の要約本、現在岩波文庫にあり）などを発見した。研究成果として、一九二八年に岩波講座「世界思潮」に「安藤昌益」を発表した。

これは狩野博士が公表した唯一の

昌益論で、現在は「狩野亨吉遺文集」に収録されている。「万物悉く相対的に成立する事実を根本の理由とし、苟くも絶対性を帯びたる独尊不易の教法及び政法は皆これを否定し、よってこれらの法に由る現在の世の中即ち法世を、自然の道に由る世の中即ち自然世に向かわしむるため、その中間道程として民族的農本組織を建設し、この組織を万国に普及せしむることに由って、全人類社会の改造を達成せしめよう」としたのが昌益であった。博士は初め昌益は狂人ではなかったかと問い、研究の結果そうではないと結論づけたとしている。

戦前では狩野博士の弟子とされる渡辺大涛氏の「安藤昌益と自然真営道」のほか唯物論哲学者の研究、また政治学者丸山真男氏の論文などを数えるのみであったが、戦後になるとノーマンを皮切りに一挙に研究が花開くことになった。反封建主義者、民主主義者、唯物論者、共産主義者、農本主義者、昌益の様々な側面に光を当てた研究が登場した。現在は農山漁村文化協会から安藤昌益全集全二十一巻、別巻一が完結、刊行されている。九二年には八戸市で記念シンポジウムも開催されている。東北の風土から生まれた自然と人の共生

の思想といった受け止め方が多いように感じられる。

学生時代、政治思想史に関心を持っていた筆者にとって昌益はなつかしい名前である。ノーマンの本に続いて一世を風靡した丸山真男氏の「日本政治思想史研究」によって昌益は親しい存在となった。丸山氏の著作は戦前の研究を戦後にまとめたものだが、昌益は徳川思想史の中で、荻生徂徠によって切り開かれた「作為」の論理を継承発展させた思想家として宣長と並んで位置づけられている。両者の存在感、影響力からいえば昌益は破格の扱いといえよう。

こうした昌益も「架空の人物」視されたこともあった。しかし、次々と関係する証拠が発見され、今ではその存在を疑う人は誰もいない。安藤昌益の教えるものは、その思想内容にとどまらず、人物、略歴などについて、軽々な断定をしないことである。丸山氏によると、昌益はしばしば長崎に行つてオランダ人に接しており、「天地は一体にして上無く下無く統べて互性なるべし」と述べている。互性とは事物の間に存在する相関的性質のことである。「天は人の上に……」と通じるものがあると感じるのは筆者だけであろうか。



# 山田宗睦 日本書紀講座 第七回

報 告

## 白銅鏡とは何か

書紀の文章を一字一句疎かにしないで厳密に読み解いて行く山田講座。本文五段は山川草木の創造、三神誕生を述べているが、実に十一の「一書に曰く」が続く。そのうちの第一の一書について、綿密な分析を聞いた。

十一の一書には三神の誕生とそれに関連する様々な神々の話が次々に出てくる。イザナキが白銅鏡を左手でとった時に生まれたのがオオヒルメ、右手でとった時に生まれて来たのがツクヨミ、首を回して顧みた時に生まれてきたのがスサノオであるという。そしてオオヒルメとツクヨミは性格も人柄も良いが、スサノオはその逆である。それゆえ、オオヒルメとツクヨミはアメノシタを、スサノオは根国を治めることになる。話の筋はこれだけであるが、白銅鏡を問うことによってほぼ一回分の講義となるのである。

白銅鏡は青銅鏡のことで、当時の日本人には青と白が同じ感覚でとら

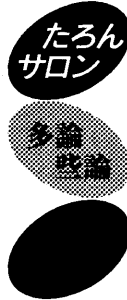
えられていた。大別すれば前漢鏡と後漢鏡になる。白銅鏡はどこから出てくるか、弥生の北九州である。第一の一書が北九州の話であることを示唆する。北九州では白銅鏡は埋葬用に使われてきたことは明らかである。しかるに、ここではイザナキは化粧の道具として使っていると見ざるをえない。鏡を化粧の道具として使い始めたのはずっと後世のことである。白銅鏡にも異なった時間がたたみ込まれている。

日本人は、世界では例外的に右より左を重んじる。(左大臣は右大臣よりエライ)。オオヒルメがツクヨミより上位になることは左手、右手によって示されている。ここでもスサノオは謎である。なぜスサノオは乱暴をするのか、その理由について考えてみることを宿題にされた。もう一つ、日本人はいつから鏡を化粧用に使うようになったか、調べてみることも。いずれも難題だ。

白銅鏡の考察には考古学の視点が必要不可欠だ。北九州の在野の考古学者、原田大六氏の業績評価、その人物像について楽しそうに語られた。卑弥呼の鏡を三角縁神獣鏡とし同範鏡の理論で知られる小林行雄氏についても同様である。

もう一つ、印象に残ったのは「御

寓」と「御宇」についてである。天下を統治することだが、中国の王朝による使い分け、日本列島の諸地域との多彩な交流の反映を示唆された。手抜きをしないで一字一句立ち止まって読むことの具体例を身を以て示された。それにしてもスサノオの宿題は重たい。(木村由紀雄・記)



## 「ダーウィニズム論集」の証言

木村由紀雄

毎日多忙なサラリーマン生活を送っている私にとって、新刊広告の中から何か臭ってきそうな本を見つけ、注文し、ヒマをみつめて読むのが楽しみの一つである。昨春秋、岩波文庫で八杉龍一編訳「ダーウィニズム論集」の予告を見て「何かあるかもしれない」と感じて注文した。

これはあまりにも有名なダーウィンの「種の起源」(一八五九年)の衝撃を受けた各界、各分野の論者が進化した論について述べた論文を集めたものである。ハクスリ、ヘッケル、ペンサー、ハルトマン、デュレイな

ど有名な学者が顔を揃えている。進化論が欧米の社会思想、世界観にまで与えた影響の大きさがうかがえる。もちろん日本にも影響を与え、特に明治時代に大流行したことはよく知られている。

さらに明治以前(一八六八年以前)はどうであったか。八杉氏の説明ではすでに先行研究があり、「莊子」にすでにみられる進化的観念は別にしても、江戸中期の石門心学ではっきり進化論が述べられているのである。石門心学の鎌田柳泓(一七五四～一八二二)の死後に刊行された「心学奥の棧」(一八二二年)の中に「天下の生物有情非情ともにみな一種よりして散じて万種となる者なるべし。人身の如きも其初唯禽獸胎中より展転変化して生じ来るものなるべし」という記述がある。「種の起源」刊行の三十年以上も前のことである。しかも鎌田の著作は岩波の思





想大系「石門心学」に収められている。

八杉氏は「これはもちろんチャールズ・ダーウィンの学説にもとづくものではなく、祖父エラズマスの臭いがかぎとられる」と述べている。ヨーロッパから入ったものに間違いないであろうともいわれるが、そういった学問を受容できたのは長崎あたりか。とにかく一八世紀末の寛政年間、日本人がチャールズ・ダーウィンの以前の進化論を学ぶことは可能であったのだ。そしてそうした研究はすでに活字になっていたが、ただ知られていなかっただけのことである。

## 鷹狩り(放鷹術)について

湯川 由雄

万葉集卷十三東歌を読む会で、鷹狩りの歌が出た。三四三八で「都武賀野に鈴が音聞こゆ可牟思太の殿の仲子し鷹狩りすらしも」(註、仲子は次男)

そこで話題は、古代鷹狩りは誰にでもできたものか、天皇や貴族、武士の統領が行ったという記録はあるが、それ以外ではできなかったのか、もしそうだとすれば、この可牟思太の殿とは何か、関東に於ける大王ではなかったか、可牟とは神ではない

か等々結論は出なかったものの何となく「関東に大王あり」との影が見えるような感じでした。

たまたま高田会長から十月二十九日(土)に浜離宮において鷹狩り(放鷹術)の実演があるとの連絡を受け、早速見学に行ってみた。

実演は小雨の中決行されたが、良く馴らされた鷹が、鷹匠と鷹匠の間を飛び交ったり、飛んでいる鳩を(紐がついている)捕るところは、鷹匠の技術とはいえないことなものでした。鷹狩りの歴史はその時に聞いた

り、調べたりしたのですが、わが国の鷹狩りは中国から朝鮮を経て伝わったもので、記録に残っているものでは日本書紀仁徳紀四十三年の条に酒の君をして百済の法にならわせて俱知(鷹)を養わせ、韋(あしかわ)の縉(あしを)を以てその足につけ、小鈴を以てその尾につけ、腕の上に据えて、天皇に献るとあり、鷹甘部の起源を伝えている。

また播磨風土記揖保郡の項には、応神天皇が鷹狩りで鷹の鈴を落とし探したが無かったという記録もある。万葉集で鷹狩りの歌は大伴家持で(四〇二一、一五、四一、五四、五五)越中の国主の時に行った歌がある。近くは織田信長、徳川家康、吉宗が行った記録があるが、いずれに

しても鷹狩りは特別な地位にあった人の、ステータスシンボルとしてのものではなかっただろうか。世界的にみても古来各国で行われており、BC七〇〇年頃のエジプト、アッシリア、ペルシャ等に記録が残っているようだが、いずれも王様のスポーツとして行われたようである。私も実際に鷹を腕にとまらせてもらったが、大変気の良いものでした。

鷹狩りの鷹は二歳ぐらいの若鷹から仕込まれ、雌が良いとされ、品種は北朝鮮産の「東海青」が良いといわれている。なお鷹に鈴をつけるのは獲物を捕ったときの所在を知るためとのことでした。

## 埴輪と多利思北孤

富永 長三

古墳に樹立された埴輪にはさまざまな形がある。中でも人物埴輪は変化にとんでもおもしろい。男女の別、職業(?)の別、階級(階層)の別、あるいは立つ、座る、ひざまづく等々姿態の違いをも表現する。これら一つ一つが、あるいは集団で、何を表現しているのかは、諸説あつて必ずしも明瞭ではない。これらの中に胡座する埴輪がある。群馬県高崎

市、綿貫観山古墳(六世紀後半、百メートル級)のそれを見てみよう。

とんがり帽子をかぶり、両手は胸の前で合掌し、着衣は三角文で飾る。腰には鈴付大帯をつけ、太刀を履く。下半身はスカート状に広がり、裾にはこれまた鈴を付け回す。そしてあぐらを組み、椅子(台)に座る。この人物像は腰につけた鈴付大帯が、この古墳の副葬品にあることから、主葬者像であると推定される(胡座の埴輪は、ほかに福島県いわき市神谷作一〇一号墳等々ある。いずれも中心人物・王者像であろう)。またその豪華な副葬品中、鏡は百済武寧王陵の鏡と同形であり、響銅製水瓶は北斉・庫狄廻洛墓と、冑は北魏と、また馬具は九州・沖の島と関連づけられ、国際色豊かな王者であったと推定される。

さて埴輪の造形は、すべてが全身像になるわけではない。全身像は中心人物に限られるようである。たとえば盾物埴輪のように、顔と盾しかないものもある。それだけで用が足るのである。一方性器を露出した埴輪がある。露出することによって特定の表現をしているのだ。すると胡座の造形は、それなりの意味を持った表現であろう。胡座する大王像、それは何を表現するのであろうか。

【隋書】倭国伝は、その王多利思北孤が跣足して座すという（跣足とは結跏趺座、仏教の座法の一つ）。これと埴輪の胡座とはまったく無関係なのであろうか。なるほど後代の仏像僧侶像と埴輪のそれとは違う。だが他の人物像の足組みとも異なる（たとえば東博の源頼朝像は足を組んではいない）。

それではなぜ多利思北孤の跣足座と、埴輪の胡座との関連を想定するのか。それは関東の古墳出土物に多分に仏教色が窺えるからである。

たとえば銅鏡。これは舍利容器と関係づけられている（法隆寺五重塔心礎埋納容器等々）。この銅鏡が関東に集中して出土する。次に小金銅仏、これが古墳出土と伝えられるものが少なくない（群馬県保渡田葉師塚古墳、同、八幡塚古墳、吉井町神保古墳等）。さらに千葉県佐原市関峰崎横穴群三号横穴から如来三尊押出仏が出土した。また仏獣鏡もある（千葉県木更津市大塚古墳他）。とりわけ観音山古墳で注目されるのは響銅製水瓶だ。これは香水あるいは香油を入れた供養具、仏具であるという。これが出土品としてはこしがなく、北斉に繋がる（法隆寺献納宝物に類似品、東博に一点、他に破片の出土あり）。仏教伝来の一ルート

を想定させてくれる。これらの背景の中で、跣足座と埴輪の胡座を考えると必ずしも無関係とは言いきれないように思う。

西に仏法天子多利思北孤あるならば、東に仏法大王がいても何の不思議もない、と思うのだがいかがなものであろうか。

### 始皇帝展に

#### 小篆「壹」を見る

佐野 郁夫

「秦の始皇帝とその時代展」で紀元前二二二年に作られた「廿六年青銅詔版」に、小篆「壹」の字を見た喜びについて述べる。

同展を世田谷美術館に昨年十月十五日に見に行く。たくさんの人出である。兵馬俑、武器、青銅器……と順番に見て行く。度量衡の部屋の中ほどに、青銅詔版があり、多くの人が並んで見ている。私もかなり時間をかけて、よく見たつもりであるが、壺の字には気づかなかった。大英博物館のように、スケッチができ、写真が撮れると有難いが、それは禁じられている。参考のために資料を購入した。帰宅してのち、青銅詔版のスケッチを描くため、資料にある写真を調

### 古田先生と和田家文書を読む会を始めます

「古田先生と和田家文書を読む」研究会を、多元の会・関東の主催で、2月24日より始めます。テキストは、北方新社版「八幡書店版の『東日流外二郡誌古代編』を各自用意ください。日時は原則隔月金曜日、午後5時半より9時まで。随時参加制はとりませんので、希望者は予め、高田会長までお申し込み下さい。なお、八幡書店版古代編は、目下品切れ中です。

高田会長談

和田家文書の本格研究は寛政原本によることは、古田先生もいとも申されているとおりですが、現在公開されている明治以後の写本によっても研究すべきことはたくさんありますし、寛政原本を研究するための予備調査として、また、古田先生の卓越した史料批判の方法を学ぶためにも、意欲ある会員の方に参加していただきたいと思えます。

べる。解説には、この写真は実物より少し大きく、実物は長方形で四隅が外側に突き出し、その突出部分に

小さな穴があげられ、全長九・五センチ幅七・八センチとある。小篆の壺の字が五行目の一番下と、六行目の六字目に二つ刻まれている。紀元前二二二年、典雅な小篆で書かれた壺の字である。古田武彦氏の『邪馬台国』はなかつた』を読んでいる私には、壺の字には特別な思い入れがある。

資料解説と照合してみても、おや、と思った。解説の全文を紹介しよう。廿六年皇帝盡并、兼天下諸侯黔首、大安立號為皇帝、乃詔丞相狀綰、



(壺)



(壺)

小篆の壺と壺

法度量則不壺、罰疑者皆明壺之  
「初皇帝の二十六年、皇帝は天下の諸侯をすべて併合し、人民も大いに安定したので、号を立てて、皇帝となった。丞相の状と綰に命じて、法律と度量衡が同じでなければ疑念が生じるので、全てを明確にし、統一せよと、詔を下した」とある。

解説資料では、明らかに壺とあるべきところを壺に書いている。さまざまにある単位を一つにしたのであるから、ここは明らかに壺でなくてはならない。辞書を調べてみても、小篆の壺と壺は明らかに異なる。(上図)

現物で確かめるために、十一月八日、再び始皇帝展に行った。やはり、二つの箇所は、壺ではなく、小篆の壺であった。そこで係の方に、その旨を申し上げると、幸い、展覧処副処長の股塚さんがおいでになって、

別室に招かれ、いろいろお話をうかがうことができた。資料解説の誤りはすでに気がついておられ、現場の解説と共に、再版から訂正されたとのことであった。古田史学を学ぶも

## 「中国の禁書」

童培恒・安平秋 主編／氷上正・松尾康憲 訳  
新潮選書 1200円

『続日本紀』和銅元（七〇八）年改元の大赦で禁書を持って山沢に隠れている（九州王朝の）ものたちに百日以内に出来れば罪を赦す」と懐柔している。古田先生はこの禁書を「九州王朝の歴史書」と言っておられる。それに対し「禁書」というのはあくまで律令の用語であり、「養老律令で定めている以外になじ」という立場の人もいる。

さて最近出版された『中国の禁書』を読むと秦の始皇帝のもとで行われた禁書は四巻に別れていた。第一条「史官は秦にあらざる記を皆之を焼く」とりまじ戦国七雄のうち秦の滅ばした六国の歴史文献をすべて焼くこと。第二条「詩経」尚書」類の一般民衆の所蔵の禁止。第三条はその刑。第四条、戦国六国の記の内「去りざるは医薬・卜筮、種樹の書」。坑儒事件はその一年後、「仙人を求め、不老不死の薬を欲した始皇帝は陛下の方が集団逃亡したことで激怒し、その怒りを咸陽の儒生に向けた」といって偶発的なものであった。

この第一条の禁書は百国秦以外の六国の歴史の抹殺で、私はAタイプと呼ぶ。

のレベルを中国側にアピールできたと、喜んでいい。

次の機会には、同じ秦代の、嶧山刻石托本に見える壹の字について、解説申し上げたい。

## 齊藤里喜代

第二条の禁書は支配者は管理所有するが、一般に知られたら都合が悪いので所有を禁止するもので、Bタイプと呼ぶ。

日本の禁書で、Aタイプが冒頭に述べた『続日本紀』の禁書だ。Bタイプが「養老律令」名令律下逸文、職制律凡玄家器物条、僧尼令上観玄家条、雑令凡秘書条であるが、いずれも本文に「禁書」という単語を使っていない。『続日本紀』に唯一回出るAタイプの「禁書」という単語を『養老律令』に出てくるBタイプの「秘書」で固定しようという考えは、『養老律令』の本文の中に「禁書」という文字がないという事で、論拠を失う。

『続日本紀』の禁書がAタイプ九州王朝の歴史書の抹殺だとすると『日本書紀』の一書群（最低十種はあやふし、或書群「万葉集」の古集、古歌集という書名すら残っていない書物群や『百濟記』『百濟新撰』『百濟本紀』『柿本人麿歌集』等は近畿王朝の行なった禁書の氷山の一角ではないだろうか。現実には『続日本紀』神護景雲三（七六九）年十月十日に「大宰府言す。府庫に五経は蓄えているが、未だ三史

（史記・漢書・後漢書）の正本有らず。列代の諸史各一本給え。詔して史記・漢書・後漢書・三國志・晋書各一部賜う」とある。外国の賓客を接待する太宰府に中国の基本教養とする歴史書が無く、近畿王朝には即座に賜うほど余っている。この矛盾は中央近畿王朝が取り上げた結果とみるのはどうであろうか。

前掲「中国の禁書」をみると、中国歴代の皇帝は唐律以前では、道教を信じる北魏の太武帝が仏典を禁書（Aタイプ）、儒家を重視する北周の武帝が仏典と道書を禁書（Aタイプ）と時の権力者の好きのままに禁書している。

Bタイプは唐律疏議に詳細な説明あり、「諸の玄家器物（天文観測器械）天文（日月・五星・二十八星座等）凶書（河凶・洛書）讖書（いにしへの聖賢が未来の災難や吉祥の予兆を記した書籍）兵書（太公六略）・黄石公三略）七曜曆（日月と五星を用いて日を数える曆）「天一」「雲公式」（みな吉凶を占うやり方）私家は有することはできず、違者徒（懲役）二年、（養老職制律は一年）私に天文を習う者も同じ。その緯（儒家の經典に神意的解釈を加えた書）、候及び「論語」は禁限にあらざる」に代表される。

『江戸時代、パラウ漂流記』  
高山純著 三一書房 7000円  
文政九年、岩手の漁民がパラオ諸島に漂流し、四年後に帰国した時、長崎の役人が、聞き書きを取った。その書類を、著者が古書店で発見され、その他の研究と合わせて出版された本。私はそこに、

一年を二季に分け、二年として取り扱う習慣が見られる点に注目し、古田先生にご報告申し上げた。先生はさっそく取り上げて12月13日の産経新聞書評「古田武彦が読む」にも紹介され、うれしく思いました。

## 棟札銘にあった「定居」

大内 道子

大阪泉佐野市にある真言宗・慈眼院は泉州の最古刹です。天武・聖武両天皇の勅願寺でもあったこの寺に、国宝の優美な多宝塔があります。「近年、多宝塔を解体修理した折、玉皇三韓新羅國、修明正覺王、定居七年」と銘記された棟札が発見された」と段照麟氏が「大阪における朝鮮文化」に書かれたのを読んでから六年、「定居」を「九州年号」と知ってから三年：先日、思い切ってご住職に伺った結果、「定居二年壬申」（西暦六二二）とわかりました。九州年号表とも符合します。慈眼院は隣接する日根神社の神宮寺です。

日根神社（白鳳三年神殿修造）の祭神は、素戔嗚命や玉依姫命などに入れ替わっていますが、実際には、かつてこの地を支配した豪族、姓氏録にある日根造の祖・新羅國人億斯富使主を祀っているのであらう（泉佐野市史）とのこと。この地は根使主（書紀）の終焉の地とも允恭の妃通衣郎姫の宮室があった地とも言われています。

# ◎入会を歓迎します

多元の会

「多元的古代」研究会・関東は、「古田武彦氏の提唱された、多元的に歴史を観る考え方に賛同し、それを継承発展させる」とを理念として、日本の古代の真実の姿を研究する会です。そのほかに難しい決まりはありません。同好の皆様のご入会を歓迎します。

▼新規ご入会の方は、入会金1000円、会費は四月切り換えて4000円ですが、今入会の方は、来年三月までの会費として扱います。▼住所氏名（ふりがな）電話番号をお振込下さい。▼（郵便振替）口座名「多元的古代」研究会・関東▼口座番号0

## 定例会のご案内

### ①万葉集と漢文を読む会

▼2月26日・3月26日午後1時〜5時  
▼いずれも文京区民センター

一月は東歌、未勳国相聞往來の歌。  
恋しけは 来ませわが背子 垣つちやき  
うれしみからし われ立ち待たむ  
「かきつ」をどう理解するかについて

の歌も別の顔を見せられます。

うち田代や 宮のわが背は倭女の  
膝枕へててい あを恋りすな

この歌も「宮のわが背」をこのように見るかによって新たな背景が浮かび出てくる。このあたり最も東歌らしい歌が続

0170・9・768777▼お問い合わせは事務局まで。

## 伝言板

### 「古事記を読む会」を提唱

西江雄児

原「古事記」の作者は天武天皇であり天武はヤマト王朝初代王たるチャンスを得ながら、運を得ず、天子になれなかった天皇である。と私は考えます。改めて古事記を読めば、当然そこに天武の意図が見えてくるはずですが、私たちがそれを見るためには、多くの学問的エネルギーが必要です。広く全国の同好の方に、「古事記を読む会」を提唱します。ご希望の方は下記西江までご連絡下さい。

くみひです。来月は34559の歌から。

漢文は梁書高句麗伝。最近古田先生の「極南界也」の新解釈に刺激されてか、後漢書の再読をとの声も出ています。「一緒にいかがですか。(雷永長三)

### ②会員の発表と懇談の会

▼2月5日(日) 話題提供：上城誠氏。

静岡より参会の上城氏により、「一般百科事典程度の知識により、和田家文書の史料批判を行うことが、いかに難率であるかをエラスムス・ターウィンの伝記などの資料により、証言される予定。八谷進氏は、国史画帖大和桜の成り立ちを、さらに踏み込んで分析する。

〒331 大宮市西新井408-1

## ネットワーク情報

▼朝日カルチャー(新宿) 特別公開講座  
古田武彦「**記紀の知らない古代史**」  
▼3月11日・16日(二回) 3時半〜5時半  
受講料会員5000円 一般5600円  
03・33344・1941

### ▼九州古代史の謎

予備18000円  
「多元の会・九州」の副代表荒金卓也さんが、近く出版されます。地元の視角よりの実証的九州王朝論が期待されます。会員価格は追ってお知らせします。

### 【震災御見舞】

神戸地方の会員並びに「多元的古代」研究会・関西、古田史学の会の皆様に、震災お見舞い申し上げます。

### ▼3月5日(日) ゲスト 萩原法子氏。

民俗学研究者萩原法子さんをお迎えして、日本における弓矢の祭事(オビシヤ)についてお話をうかがいます。同氏は民俗学者で写真家の萩原秀三郎氏のご夫人で、長年オビシヤ行事の実地取材を続けておられます。臨場感の溢れる解説と写真をつかかえるご期待されます。

### ▼会場はいずれも文京区民センター

午後1時〜5時。  
★研究誌発行を計画しています★

多元史観を支持する各研究会が協力して、研究誌を発行するプランが進行しています。次号では具体的な内容をお知らせできると思えます。ご期待下さい。

## FROM 編集室

◆アサヒグラフ、年末の古代史発掘総まとめ号で、考古学の森浩一氏は、三内丸山などの発掘で、旧来の縄文時代観を、根本から変えなくてはならなくなったことを述べられたのち◆縄文時代の考古学は、火山学や地質学と基礎的な研究を取り交わすことによって、既成知識の見直しが進められている◆これに対して、弥生時代、古墳時代の考古学は「初めに倭人伝あり、初めに記紀あり」といった不純さがある、考古学による基礎研究を混乱させている」と言われる◆そして、いつまでも三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡であったり、畿内という、ずっと後世に成立した価値概念をもって、弥生時代を論じたりする危険さを指摘されたのち◆こういう流儀の学問では「生涯続けたとしても自分(自身)を納得させるほどの考えは生み出せないであろう」とと手厳しく指摘される◆考古学は部外者には立ち入りにくい分野である。それだけに、部外者にも納得のいく研究判断が示されるのが切望される。(魁)

### ●当会への「連絡は

会長/高田かづ子 0408(0801)011-1  
〒336浦和市南浦和3-19-22-333  
事務局/下山眞孝 044(522)4105  
〒211川崎市幸区小倉1-1-11514  
編集室/青山富士夫 03(337)77009  
〒151渋谷区本町1-7-16-102